



TITLE:

<批評・紹介>寺廣映雄著「中國革命の史的展開」

AUTHOR(S):

菅野, 正

CITATION:

菅野, 正. <批評・紹介>寺廣映雄著「中國革命の史的展開」. 東洋史研究
1979, 38(3): 475-482

ISSUE DATE:

1979-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153746>

RIGHT:

問題であるように思われる。何人もこの問題が検討に値するものであることは否定しないであろうが、『ケンブリッジ中國史』中にまるまる一章をさくのはゆきすぎであると思われるかもしれない。しかし、コーエン氏は、この外來の宗教に對する中國人の様々な反應の性格を考察することによって、また、これらの諸反應を中國の社會構造の中から生じてきたと見ることによって、この問題（著者は幅廣くこの問題について研究してきた）に新生面を開いている。従つて、この研究は、宣教師の中國に與えた衝擊（宗教的・教育的な）と、中國人の側の排外的な反應との兩方を敘述的に分析したものととなっている。

この巻には、全十一章の各々に對する文獻解題が附いている。これは極めて有用であり、將來の研究方向のみならず、現在吟味されつつある、歴史研究上の係争點の多くを指摘している。フレッチャー氏の文獻解題は、その主題の複雑さによるところが大きいだろうが、最も徹底のかつ魅力的——語學的觀點からして——である。また、本文中に引用された文獻については、より包括的な文獻目錄が附されている。

外國人讀者は『ケンブリッジ中國史』のこの巻を読んで、中國の外國との關係が強調されていることに驚かれるだろう。滿洲政府と西洋の對決が中國十九世紀史では中心的なテーマであることを否定する人はいまい。しかし、ジョーンズ、クーン、そしてフレッチャーの各氏の論文のようなものを得て始めて、この對決は、より大きな歴史的な觀點から見ることができるのである。例えば、和珅時代後の社會・政治・經濟的環境、及び白蓮教反亂の鎮壓に示された八

旗兵の軍事的無能力が述べられているので、アヘン戰爭の危機や太平天國を、清朝が處理できなかったことが更に一層理解しやすくなるだろう。特にフレッチャー氏の諸章は、十九世紀初頭において、清朝政府が何を最優先のものと考えていたのか、という問題に對する我々の見解を方向轉換させてくれる。論文のいくつかは、日本人の研究を參照してはいない。もともと、西洋の研究者の興味の對象が變わるにつれ、この狀況は變えられつつある。數世代後になつて、新『ケンブリッジ中國史』が書かれる時、この新しい潮流も組み込まれるであろう。新『ケンブリッジ中國史』も、その時になれば更に新しい研究の潮流をとらえきれないのはまちがいないであろうが。

(ジヨシユア・フォーゲル)

中國革命の史的展開

寺 廣 映 雄 著

昭和五十四年二月 東京

汲古書院 A5判 四三〇頁

辛亥革命をはじめとして中國近現代史の研究は近年著しく進展してきたが、本書は、その推進者の一人である著者が、過去二十餘年間に發表した論文の中から、主要な十五篇をえらび一書にまとめた研究論文集である。その内容がアヘン戰爭から第二次國共合作の時期までの革命史にわたっていることから、『中國革命の史的展開』と

題されたという。まず本書の構成を示せば次の如くである。

まえがき

第一部 清朝後期の政治と民衆

第一章 廣東民衆の反英運動

第二章 雲南回民運動の性質

第二部 辛亥革命の諸問題

第一章 革命瓜分論の形成をめぐる

第二章 張謇と辛亥革命

第三章 北方における革命と吳祿貞

第四章 貴州における革命と反革命

第五章 雲南護國運動について

第六章 中華革命黨と孫文革命思想の形成

第三部 辛亥革命とアジア

第一章 臺灣民族運動と中國

第二章 ヴェトナム初期民族運動と日本・中國

第三章 宮崎滔天と中國革命

第四部 一九二〇年代における中國の政治と思想

第一章 フランス勤工儉學運動について

第二章 教育權回收運動をめぐる

第五部 一九三〇年代の中國における抗日民族統一戦線の成立

第一章 中國東北における中朝抗日民族統一戦線の形成

第二章 綏遠事件と西北抗日情勢の展開

補篇一 研究の回顧と發展

補篇二 孫文著『中國革命史』

補篇一 は各論文發表後の内外の研究の動向・関連著書・論文・資料

をも紹介して周到であり、補篇二は翻譯である。他に清末革命團體の發展系統表一葉と人名索引が附されている。各章の論文には副題を附したのもあり、はじめに、結び、を含め各章をさらに各數節に分ち、頁數も註の數もはば同じ整然としたものである。以下各章をおつて内容を紹介し、ついで感想をのべてみたい。

一

第一部第一章廣東民衆の反英運動は、アヘン戰爭當時展開された反英運動の主體は、大部分は農民であり、軍資金や經濟的地盤を自らの手で用意するなど、農民自體の組織によつて自發的に行われたものであることを指摘し、彼らが目標を英國にしながら、滿清官僚に對し根強い反官・反支配權力的感情をもっていた點が強調される。五八年佛山鎮團防局の運動を最後に解體されるのは指導權をめぐる分裂が内部原因であることをあげ、會黨も加つていたこの運動と太平天国運動との繋りが展望される。第二章雲南回民運動は、咸豐五年から二十年近く雲南全域をまきこんだ反亂が、もともと回漢兩民の抗争事件であつたものが、回民を抑壓・差別し回漢の對立をことさらに挑發擴大させる滿清官僚の態度、清朝軍隊の規律の紊亂などにより、回民は道光末頃より攻撃の鋒先を漢民より滿清官僚に向けていたことをあげ、ここに杜文秀の清朝打倒の革命運動に發展していく必然性があつたとする。ここでも匪反社會分子が重要な役割を果し、この咸豐期の混亂の中で、新秩序の樹立者として回漢兩民より渴望されたのが杜であつたと。彼は太平天国と呼應し、清朝を打倒して中華を回復し、回漢平等・一體の政治體制を樹立し、回教・儒教に基く宗教政治の確立を理想としたが、同じ指導者馬如龍

の寝返りもありついに投降した。

第一部の兩章に共通して、いわゆる會黨が重要な役割を演じたこと、運動の背景に民衆の反官・反支配權力的傾向が強く内包されていたことが指摘されるが、第一章では開港によって民衆のうける影響といった側面からも説く必要があるうし、第二章では十八年間、回漢雙方から支持された杜文秀政權の實態が如何なるものであったか説明がほしい所である。

第二章第一章革命瓜分論は、一九〇五年から〇七年にかけて保皇派と革命派との間に展開された革命が内亂と瓜分を招くかという瓜分論がいつ頃から如何なる背景のもとで形成されたかを考察したもので、まず梁啓超の思想の動搖の跡を辿り、ほとんど革命論と區別できないほどの過激な言説を發表した彼が、〇三年一轉して革命主義を否定し、君主立憲主義に轉換したのは、中國に共和政治を行う條件がないとの認識と、義和團事變後一般に危惧された瓜分論ではなかったかとする。そしてこの兩派對立の直接のきっかけは、前年康有爲の書いた書翰に對して章炳麟が反駁した時だったという。即ち〇二・〇三年頃が形成の時期だとする。なお陳天華が〇五年初頭、清朝政府に變法を要求したいわゆる後退問題にふれ、これは目前に迫った瓜分の危機と革命の相剋に苦しんだ一時現象とするが、革命派の帝國主義評價の限界をも指摘する。第二章張謇は、日清戰爭以後の張の思想と行動を、政治過程との係りの中で跡づけるもので、官界をすて實業救國・教育救國の道を選ぶが、豫備立憲の時代、彼の立憲救國の主要な目的が革命勢力に對抗するものであり、武昌蜂起が起ると一轉して立憲の立場を捨てすばやく革命派に轉身することで革命の指導權を握り、また臨時政府の組織の時、蜂起後

武昌と上海での代表者會議、伍廷芳と唐紹儀の南北講和會議、北京兵變の時、彼が常に裏面で重要な役割を果し、實業總長辭任の手段で臨時政府の内部攪亂を意圖し、孫文と對立していた章炳麟を利用して同盟會の分裂を策したという。袁內閣に入閣後、商工業に關する法律の制定に着手し、その民族産業發展上での役割を評價しながらも、彼の志向する近代化の道は本質的に革命と對立する道で、敗北挫折に終る運命にあったとする。第三章は日本陸士を卒業し、有力な同盟會員でありながら、一方第六鎮統制であった吳祿貞が、滿人高級軍官と交渉をもち、清廷内部の反袁世凱勢力を巧みに利用しながら、戴澤の新軍擴張計畫に、日本陸士出身の士官を幹部に送ってその勢力を發展させようとし、專制權力が集中し、革命情勢の極めて困難であった北方において、武昌蜂起後おこった灤州兵諫事件と山西獨立宣布という事件を通じ、彼の抱く革命計畫を如何に實現せんとしたかをみるものである。後者の事件を通じ、從來の表面上清朝擁護の立場を放棄して革命を決意し、燕晉連合軍を組織し、武漢革命軍と連絡をとらんとした直後、暗殺された。吳祿貞が、終始革命の眞の敵は袁世凱であるとの認識の上で行動したのは彼の先見の明であると評價する。第四章は各省獨立の中で革命派にとって最も悲惨な歴史となったと言われる貴州における辛亥革命をみるもので、張百麟らの革命結社自治學社の進出に脅威を感じた唐爾爾一派は憲政豫備會を組織して立憲派としての基礎を固め、革命情勢が進展してくると、革命派と妥協して革命のヘゲモニーを奪取せんと試みる。立憲派による反革命は、劉顯世の武力と結合しつつ、郷紳層を背景に、會黨を煽動して政治的・社會的混亂をおこさせ、これを口實に革命政權を破壊することにあり、ここに雲南獨立の中核であ

った雲南新軍によって貴州革命政權が破壊されることとなり、袁世凱政權と結合することでそれは實現した。こうして巧みにヘゲモニーを掌握した立憲派は、郷紳の勢力を背景にして民國における封建軍閥の基礎へと轉身をとげたとする。第五章雲南護國運動については、蜂起に關し梁啓超自身が記す諸記録には疑問點が多いとその檢討から始め、主導者は雲南軍界の中下級士官と一部の共和派で、第一革命と第三革命とが政治的・思想的に密接な關係にあったことが示され、唐繼堯の役割は被動的で靜觀的な態度であり、軍政院の成立は、進歩黨と右派國民黨との統一戰線的性格をもたしたが、このことがかえって運動に對し限界と變質をもたらし、そのヘゲモニーが少壯士官から軍閥政客の手に移行したことを意味すると結ぶ。

第六章は、從來低い評價しか與えられなかった中華革命黨について、中國國民黨の直接の基礎がここにおかれていたのではないかとして、成立の背景・性格を孫文の革命思想の發展と関連させながら検討したもので、民國初年以來の革命の挫折に對する反省と教訓から、専ら同盟會時代の革命精神・理論・方式の再現と徹底化をはかり、その後期においては、從來の武力一邊倒の革命方式から國民の心理革命の重要性と、人民の中に革命のエネルギーを求めねばならぬことを認識するに至り、五・四運動にも刺激され、國民革命の方向が打出されてきたとする。

第二部第一章は著者獨自の見解を先行論文や資料を整理した上で出されたもので、革命派の帝國主義評價については賛成である。第二章張謇は、孫文と異なり民衆の側に立たなかつた所に矛盾と悲劇があつたとの批判であるが、帝國主義支配下の半封建社會の中で、大ブルジョワの典型を見、宿命・運命といったものを感じる。

第三章は殆んど不明であつた北方における革命をとりあげた意義は大きい。が吳祿貞と漢州兵諫事件、山西獨立宣布との關係をもう少し解明してほしい所である。第四章、第五章を通じて、雲南新軍の性格・實態が如何なるものであつたのか、なぜそれが貴州の反革命にたやすく利用されたのか、貴州において相つぐ逆轉のあつた背景は何なのかの疑問が残る。第六章では第一次大戰・二十一箇條問題、五・四運動と對外問題がますます大きくなつてくる時に、この問題、とくに日本に對し如何に對處せんとしたかの説明があればより多角的になるように思う。

第三部第一章は副題の如く「辛亥革命の影響を中心として」進めながら、半世紀に及ぶ日本支配下における民族獨立運動の歴史をほぼ全時代扱っている。一九一五年頃を境とする前半期の武力闘争期では、廈門が抗日ゲリラの據點となること、義和團事變時の本願寺放火事件に言及し、辛亥革命期では一三年十月の苗栗事件が、失敗したとはいえ同盟會員羅福星が直接關與し、明確な民族共和主義革命を志向していたと評價される。後半期の政治闘争期では、五・四期文化思想啓蒙運動をおこさんと臺灣文化協會ができるが、北伐の革命高揚期には一步を進めて日本打倒・臺灣獨立の政治運動と進展し、マルクス主義の影響が出てくると二七年四月反共クーデターと軌を一にして左右に分裂していく過程がのべられる。第二章はフランスのインドシナ支配に對する抵抗の中で、結社維新會の設立者である潘佩珠^{潘佩珠}に焦點を合わせて考察するものである。彼は武器獲得のため來日するが、人材養成が祖國復興の急務であると考えいわず、東遊運動を始め、孫文にも會い、孫は越南獨立の支援を約束し、潘はその亞州聯合の思想を深めた。しかし一九〇七年締結の日佛協

約は獨立運動に重大な影響を與えた。新思想の據點であつた東京義塾は佛總督により封鎖され、在日中の越南志士や留學生も國外に退去させられる。辛亥革命期、潘は新たに廣東で越南光復會を發足させ、ブルジョワ民主主義を目標にした綱領を作り、越南光復軍の軍事蜂起を計畫したが、中國革命の挫折から光復會も解散され潘は獄中に投ぜられる半生を跡づける。第三章は中國革命に従事した宮崎滔天の行動についての概略である。その動機が從來の國權主義的版圖擴張の東洋經略論や清朝腐敗的な征清主義といったものとは明確に異なり、中國に新しく芽生えてきた革命勢力に着目し、その力を成長させてアジア民族を復興させることを考え、その背後には民權主義・人類主義・四海同胞主義があつたとし、純情多感な性格と俠義的精神をもち、中國國民に對して眞の愛情を抱いてゐたとするが、革命理論や社會主義思想の持主ではなく、まして自國の帝國主義に刃を向けることがなかつたことが思想的限界であつたとする。

第三部は辛亥革命を廣くアジア的視野の中で考察せんとするが、第一章・第二章を通じ、孫文は潘佩珠に對し「中國革命成功の曉にヴェトナム獨立を支援しよう」と約束し、苗栗事件は同盟會員羅福星が指導し、廣東・福建都督が援助したというが、それが彼のはね上りの冒險主義であつたのか、異民族清朝打倒の革命事業に従事する中で、同じ異民族支配下の臺灣の獨立を、孫文以下の指導層は如何に意識してゐたかの疑念が残る。第三章宮崎滔天はやや心情的なとらえ方である。

第四部第一章は勤工儉學という特異な方法で一九一九年からフランスに渡つた二千名の留學生の運動についてその背景・歴史・問題を解明したものである。その起源は〇七年李石曾が在佛中國人勞

働者に教育の機會を與えんとしたことにあり、吳稚暉・蔡元培らが勞働と勉學を一致させる工讀運動に意義を認め、留佛勤工儉學會・華法教育會をつくり、フランス留學の機會を與えんとした。第一次大戰終結後失業問題も伴つて様々な困難な問題がおこり學生と教育會とが對立した。蔡和森・王若飛らが生存權・勞働權・求學權を求め公使館へ押しかけた事件、中佛合同の里昂大學に入學を拒否された勤工儉學生が大學を占據した事件がおこつた。結局、フナーキストの李石曾・吳稚暉、ブルジョワ民主主義者の蔡元培らと、五・四運動を経験し、實際にフランスで勞働をしてゐる學生とは思想的にも相容れず對立するのは必然であつたとする。リヨン大學奪回闘争を指導してゐた周恩來らの學生團體は合體して、二二年中共旅法總支部に改組され、この中から多くの者がモスクワ東方大學に入學した。こうして勤工儉學生の中で歸國後中國共產黨で重要な地位を占めた者が多く、その歴史上重要な意義をもつものであるとする。副題は「中國共產黨成立の一側面」。第二章は五・四運動以前に流行した非宗教・宗教拒否に端を發した教育權回收運動を、「醒獅」を創刊して、政治的性格の強い國家主義的教育政策をかがけ、共產黨に對抗するのが主要な目標であつた國家主義派と、中國社會主義青年團を指導しながら、この教育權回收の反キリスト教運動を反帝國主義運動の一環としてとらえる中國共產黨との兩派を通じて考察するものである。兩派は非宗教・教會教育反對、教育權回收の目標に限れば矛盾することなく一致してゐたが、五・三〇事件を契機に運動が大きく發展するに及んで兩派の對立は決定的となつた。當時未完成に終つたこの運動において、後者の指導する反帝・反封建の革命の進展こそが、眞の解決の方向であつたとする。

第四部は一九二〇年代前半の教育問題を通じてこの時期の政治・思想状況が考察されるが、第一章は未開拓の留佛勤工儉學運動を、五・四運動の一環として、中國共產黨成立の一齣としての視點を提示し、第二章は教育權回收運動を教育史、キリスト教史の枠をこえ、民族運動の重要な一環としての視點を提供し、ともに新しい光を與えたものでその意義は大きい。

第五部第一章は「朝鮮人民の闘いをめぐって」と副題があり、三〇年代東北で展開された抗日バルチザン闘争が、朝鮮民主主義人民共和國成立の基礎を形成し、それが中朝兩國人民の連帶の戦いであった點で中國革命史の重要な一環であり、本土での統一戦線成立に先立つ點でも高く評價されるとする。この闘争の過程と、中朝人民の離間策を策謀する日本の民生團による工作に對する對處を通じて、金日成の指導權が確立されていく道程が説明される。即ち祖國光復會の結成、白頭山周邊への根據地の移動、中共からの冒險的な指令に對する批判と行動など、金は基本的には中共指導による中朝連帶の枠内にありながら、實質的には朝鮮人民を獨自の方向に指導していき、三〇年代後半期の國際的な革命任務と自國の革命任務を統一的に把握していったとする。第二章はもし西安事件が起らなかったら日中間に戦端が開かれたであろうといわれるほど大反響を呼んだ三六年十一月の綏遠事件をめぐる、西北地區の抗日動向を扱ったもの。事件は關東軍の一參謀による個人的性格の強い謀略で、關東軍に後押された蒙古軍が綏遠に侵入して撃滅されたものである。中國はこの事件を國家存亡に係ると重大視し、全國的に援綏運動が展開された。「西北嚮導」は今まで専ら剿匪に従事していた東北軍將兵に抗日に立上るよう要請し、長征をおえていた陝北紅軍

も、これによっておこった抗日の要求を背景に、抗日統一戦線の實現を蔣介石に迫った。蔣の拒否の結果、劇的な西安事件がおこった。

第五部は抗日民族統一戦線の成立に關する研究であるが、抗日戦線の成立であれば、日本の對應が如何なるものであったか、とくに第二章でもその點を追求してはしなかった。

二

以上、各章の内容をごく概略紹介したが、各論文は問題點の所在を廣く周邊との關連の中で位置づけせんとするもので、その歴史的背景にも十分配慮され、しかも實證的な内容豊かなものであるだけに、限られた紙數で紹介しきれぬものでない。そしてこの十五篇の論文の配列は發表年代と一致しないが、これらを通觀する時、筆者は、著者の研究課題の關心の變遷から三時期に區分することができと思う。即ち大體のところ、一九五四年著者の研究の出發點といわれる宮崎滔天に關するものが出てから六〇年代初期までを第一期とする。この時期は第一部の廣東の抗英運動、雲南ムスリムの反亂、第二部の雲南護國軍、貴州の革命というように、主としていはば中國西南の邊境における問題に焦點を合せて研究し、そして大體六〇年代の第二期では課題を辛亥革命とそれに關連するテーマに絞って銳意その解明にあたり、第二部・第三部の論文がほとんどこの時期に含まれる。六〇年代末から七〇年代に入つての第三期では、研究對象・時代を引下げて二〇年代、三〇年代の問題に移して考察し、即ち第四部・第五部の論文がこれである。もともと第三期に入つても革命瓜分論といった第二期の研究テーマに入るべきものもあるが、それはともかくとしてこれを通じて著者の研究領域を廣げて

いく課題意識の變遷の軌跡を窺い知ることができる。その研究の際、著者のとられる姿勢は、中國近現代史を一貫して反帝國主義・反封建主義の革命史としてとらえる立場であり、さらに民衆の次元から解明せんとする立場に立つようであるが、それでいてしばしば見られるような一元的・公式主義的な論斷に陥入ることなく、客觀的に綜合的に把握せんとするものである。

本書の刊行の意義は大きい。一つには所收の論文の殆んどが著者が所屬される大阪教育（學藝）大學の紀要・研究誌に發表されたもので、また古いもので今日我々が閱讀することが困難なものもあり、それが一書になって提供されて容易に讀み得るようになったことである。それよりも何よりも本書の意義は、未開拓の分野を切り開き、研究史の空白になっている部分に初めて光をあてた先驅的な論文、研究で不十分な所に新しい見解を示し視點をすえた論文が多く含まれていることである。雲南護國軍、吳祿貞、貴州の革命、臺灣・ヴェトナム民族運動、綏遠事件、留佛勤工儉學運動に関する論文などが前者の例であり、雲南ムスリムの反亂、中華革命黨、滿州抗日民族運動、教育權回收に関する論文が後者の例であろう。もとより他のすべての研究者もそういった問題意識で研究するものであるが、所收論文には我國において最近めざましく進展してきた各省における辛亥革命の個別的な事例研究、留佛勤工儉學運動、ヴェトナム民族運動、抗日民族統一戰線・雲南回民運動・廣東抗英鬪爭・白朗の亂などの研究の先鞭となったものや、研究史における初期段階の論文となったものなど開拓的な論文が多い。所收論文の中にはかなり以前に發表されたものもあり、その後研究はもとより進展し、所收論文より深く研究されたものもあるが、今日なおかつ存在

價值を失っていないものが多い。こういった本書の出版は裨益する所大なるものがあると思う。資料が今日のように豊かに出揃わない以前に、さらに参考文献も少い困難な状況の中で、乏しい資料を駆使して或いは少しの資料の疑問點について、確かな實證的な論文を書かれた點には敬意を表したい。

しかしながら、本書はそういった價值ある論文集であるが、希望がないわけではない。著者ははしがきで、本書は百年の革命史を網羅的に扱っているわけではなく、その意味で決して中國革命史の概説でない、と斷っておられるが、本書は辛亥革命に直接・間接關係するもの九篇を中心に十五篇で構成されており、革命史の重要な課題である太平天国、義和團、五・四運動などを直接扱うものでない。しかし、これらを直接扱わないまでも、中國近現代史を如何に把握するか、或いは辛亥革命を如何に見なすか、その全體像を概括的に窺い知る總論というべきものが一篇あればよかったと思う。著者は、前述のように中國近現代史を一貫して反帝・反封建の立場から、さらに民衆の次元からとらえんとする立場に立つことは各論文中で十分窺えるが、中國近現代を見通す一篇を示すことで著者の立場をより明確に示してほしかったと思う。全體を體系化、總體化する一篇で革命史を連續的な發展でとらえることによって『中國革命の史的展開』を示してほしかった。次に、所收の論文には、個々の課題の主として政治的・思想的な側面を重視し、社會的・經濟的側面を捨象しているものもあるが、その側面により配慮することによって、より立體的に綜合的に把握できるものと思う。そのことは、中國近現代史を一國史内にとどめて考えるのでなく、廣く日本・アジアさらにはヨーロッパ近現代史との關係で把握することの必要性

においても同様であり、著者はその點十分配慮しておられるが、日本との関係にもう少しふれてはしなかった部分もある。さらに清末革命團體の發展系統表、その離合集散は大變に複雑な所であるが、せめて民國初年中華革命黨の頃まで扱ってほしかったし、事項索引があればもっと便宜を與えたと思う。

以上、多くの望蜀の言を並べ、見當違ひの言のあつた失禮の所はご海容頂きたい。また著者の言われんとする眞意を、誤解なく傳え

得たか、ただ恐れるばかりである。最後に、著者が今後ますます研鑽され、八〇年代の第四期へ向けて新しい分野を開拓され、體系化され、後進に示されんことを祈念しつつ大雑把な感想だけに終つた蕪雜な一文を終える。
(菅野 正)

(追記) 本書の書評については久保田文次氏・守川正道氏がそれぞれ『東洋學報』『アジア・クォーターリ』の近刊號でも取上げられる豫定である。